

観光社会資本の事例

テーマ	日本最古の道路開閉橋(長浜大橋)		
【施設の状況写真】			
			
<p style="text-align: center;">肱川河口付近に架かる日本最古の道路開閉橋(長浜大橋)</p>			
【施設の利用写真】			
 <p>「肱川あらし展望公園」外観</p>	 <p>「肱川あらし」の中の「長浜大橋」(写真下側の赤橋)と新長浜大橋(写真上側)</p>	 <p>「肱川あらし」の中 通学する児童</p>	 <p>沈みゆく夕日の中の「長浜大橋」</p>
【観光資源としての利用状況】			
<p>平成10年に登録有形文化財として登録された「長浜大橋」は、一級河川「肱川」の河口に架かる現役で動く我が国最古の道路可動橋(バスキュール式鉄鋼開閉橋)です。この橋は昭和10年に県道橋(現在の主要地方道大洲長浜線)として完成しました。船便が重要な輸送手段であった当時は、大きな船が通過する度に開閉していたこの橋も、現在ではもっぱら観光用として、毎週日曜日の午後1時に開閉を行っています。特に、秋から冬にかけては、「肱川」上流の大洲盆地の冷たい空気と伊予灘(瀬戸内海)の海水との温度差が原因で霧が発生し、その霧が「肱川」を伝い伊予灘に向かって音をたてて吹き下る「肱川あらし」に吹かれる真紅な長浜大橋を求めて、県内外から多数の見学者が訪れています。</p>			
<p>また、「肱川あらし展望公園」は、「肱川」の右岸側山頂にあり、その名の通り、「肱川あらし」とともに「長浜大橋」を眺める絶好の場所となります。霧が町をのみ込み、うねりながら海へと扇状に広がる「肱川あらし」の様子は、幻想的で息をのむ美しさです。</p>			

テーマ	日本最古の道路開閉橋(長浜大橋)
<p>【社会資本の基礎データ】</p> <p>名称 長浜大橋</p> <p>所在地 愛媛県大洲市(旧長浜町)</p> <p>事業名 長浜大橋</p> <p>事業主体 愛媛県</p> <p>事業期間 昭和7年～昭和10年</p>	
<p>【社会資本の役割・効果】</p> <p>「長浜大橋」の計画当時、長浜は「肱川」の舟運の拠点として、川を下ってくる木材や木蠟等の物資の積み替え、搬出、逆に川上へのさまざまな生活物資の中継港として栄え、伊予灘に面した漁港としても繁栄をきわめていました。当時、街の中心地である東岸と集落のあった西岸との間に渡し船がありましたが、交通を改善するため、橋の建設が計画されました。「肱川」は比較的水深が深く、舟運を阻害しない可動橋の建設は当時としては画期的なアイデアでした。</p> <p>昭和7年に着工し、昭和10年に完成した「長浜大橋」は、橋長が226m、幅員が5.5m、開閉部分の延長が18mで、重量が82トンありますが、中央のカウンターウェイトの部分が一種の分銅の役目をして、小さな動力で開閉できる構造となっています。</p> <p>昭和52年には、下流側に新長浜大橋が架橋されましたが、今も「長浜大橋」は地元の生活道路として利用され、自転車や歩行者が行き交っており、地元の人、この橋を、愛着を込めて「赤橋」と呼んでいます。</p>	
<p>【位置図】</p> 	
<p>【関連ホームページ】</p> <p>愛媛県観光情報<トラベル愛媛> http://www.pref.ehime.jp/izanai/kankou.html</p> <p>長浜町商工会観光・イベント情報 http://www.ehime-iinet.or.jp/nagahama/naga_info.htm</p>	